

2024年度311ゼミナール第6期

# 被災地実情班②

## 「仙台市荒浜地区での消防団活動」

### 報告書

院生	佐藤駿	院生	鈴木隆宏
4年	船山雄太		
4年	小野崎彩菜	4年	在原真優
3年	阿部志帆	3年	高橋輝良々
1年	小山七海	1年	葛西香帆
1年	高木那々実	1年	千葉奈々子
1年	千葉雄翔	1年	西美紗緒
1年	福岡加彩	1年	丸山雛奈
1年	村上はな	1年	目黒和迦奈

# 目次

はじめに 01

調査の概要 02

聴き取り内容 03

- ・ A地点
- ・ B地点

消防団活動 総括 04

ゼミ生感想 05

追加視察 閑上 06

追加視察 総括 07

## はじめに

私たち被災地実情班は、「東日本大震災の経験を知り、語り継ぐこと」「次の災害に備え、教訓を生かすこと」を目標とし、活動している。宮城県石巻市沿岸地域の被災地をフィールドにし、現地の方へのインタビュー調査や現地の視察を行ってきた。仙台市の被害に焦点を当てて活動することが少なかったが、仙台市の都市近郊にも東日本大震災の大きな被害があった地区がある。そこで今回の調査では、仙台市荒浜地区の被災について、当時消防団として派遣された方の聴き取り調査を行うことで、仙台市内での被災を考える機会を設定した。

今回の調査では、仙台市青葉消防団中央分団の方に聞き取り調査を行った。311ゼミナールのゼミ生である4年船山雄太が中央分団に所属しており、聞き取り調査を設定する流れとなった。

青葉消防団中央分団は、東日本大震災の発災後に、荒浜地区に派遣され捜索活動を行っていた。消防団員がどのような活動を行ったのか、津波被害の現場から離れた地区の消防団員が活動した経緯やその時活動した団員の様子について調査を行うことで、東日本大震災当時の被災地の様子を理解し、後の災害への教訓とすることや、地域防災の要となる消防団について理解を図ることを目的として活動を行った。

10月23日ゼミの時間に仙台市消防局、青葉消防団中央分団の皆さんから、震災時の消防団活動についてレクチャーを受け、11月9日に現地で聴き取り調査を行った。

## 02 調査の概要

### 事前レクチャー

日時：令和6年10月23日（水）12時～13時

場所：宮城教育大学 430講義室

### 現地調査

日時：令和6年11月9日（土）9時30分～12時

場所：震災遺構 仙台市立荒浜小学校 周辺

（A班 東部道路周辺、B班 旧産廃業者前）





# 03 聴き取り内容

## A地点



### A 1 班

畑 富美男 分団長

震災当時 50歳

当時在籍 5年目



### A 2 班

坂口 清敏 部長

震災当時 45歳

当時在籍 9年目

### ○搜索活動に参加することに関して

3月11日に搜索しに行った人が周りにいた。その人が「人ってああいうふうにして亡くなるんだな」と言っていた。それを聞いて、ビビって俺行きたくないって言って12日の搜索には参加しなかった。フェンスにご遺体が引っかかっていたという話や、田んぼの畦道に座っている人がいて、生存者発見って思ったら、亡くなっていたという様な話を聞いて、本当に行きたくなかった。



12日までは東二番丁小学校で避難してくる人たちの食料の配給などを行っていた。その人は足りているから、とにかくこっちにきて手伝ってくれということで、13日は荒浜地区へ出動した。12日の段階でほとんどのご遺体は回収されていた。その話を聞いて、私は荒浜に向かった。もうご遺体が少ないということを聞いて、向かう決心をした。

管轄外の地域で活動すること自体に関しては、人がいなくて大変なんだから、手伝うのが当たり前だろうなという様な意識だった。困っているから助ける。

### ○搜索活動当日

始めに、現場に降りた時、「これどうすんの？」っていう感じだった。悲しいとか嬉しいとか何もない、無表情になってしまった。

厳しい現場を見たのは初めてだった。だからそれをみて無表情になってしまった。それまでは想像すらできなかったから、本当にどうすれば良いかわからなくなった。

今まで見たこともない様な景色だった。それまで想像していたことと全然違う風景で本当にびっくりした。一番ひどいなと思った光景は、瓦礫の山。家が2階部分だけあったりとか、車が何個もひっくり返ったりしている様子だった。

田んぼだからとにかく水はけが悪かった。そのため、鳶口を使って突いて、中に沈んでいる人を探した。その時の心境としては、とにかく自分のところには当たらないで欲しいなという気持ちだった。そのようにして考えると、水面から手の様なものが見えてしまった。嫌だなと思っていたが、実際は木の枝だった。そのくらい精神的に変になってしまっていた。

ただただ無表情で搜索をし続けていた。長靴の中にも水が入ってきたりした。いつもなら「なんだよ穴空いてるぞこれ」というところだったが、そんな感情も沸かなかった。最低限の会話しかしなかった。

最終的に私たちの小隊ではご遺体を見つけることができなかった。隣の小隊で見つけた方がいた。すぐにブルーシートで包んでそれを道路に置いて、消防団の活動は終わりだった。それを自衛隊が持っていくというような形だった。

でも自衛隊が来る前に、「この人は一体誰なんだろう、絶対この人を探している人があるはずだと思った。」そこで、持ち物を探してみたら、免許証を発見した。名前と住所が書いてあった。それを家に帰ってから、被害連絡板と言われるような掲示板に書き込んだ。すると10分後にすぐ電話がかかってきた。地震が起きた瞬間にその方が訪れていた定食屋の店員からの連絡だった。その人の話によると大阪から仙台に出張に来ており、その営業中だったということだった。地震が収まってすぐに店を飛び出して海の方に車で向かっていたという話だった。

その後会社の社員からも電話がかかってきて、その人を探していたということだった。どこにご遺体が持っていかれたのかを聞いてきて、宮城県内の四ヶ所の収容所を伝えたところ、大阪から仙台までご遺体を引き取りに行くという様な話をしてきた。しかし燃料がないからこっちには来ないほうがいいという様なことを伝えた。

13日に見つけられたのはその1人だけだった。





### ○搜索活動に行くことに対する、家族の反応

当時は奥さんと二人でマンションの13階に暮らしていて、冷蔵庫が家の反対側の角に移動するくらいすごい地震だった。だから、消防団の活動にいくって言った時、奥さんに泣かれた。「家のこともしないで、消防団なんて！まず自分の家のことをちゃんとしてから行って」と言われた。

その当時奥さんの親戚が七ヶ浜に住んでおり、連絡がつかない状態だった。義理の兄とお袋の連絡がつかなかった。「七ヶ浜も同じように消防団の人が探してるから、それはそっちの人に任せよう。後は俺たち二人が生きてればなんとかなるから、片付けなんか後にして、まだ連絡取れない人たち助けないとダメだろ？」というように行って、家を出てきた。

5日くらい経ってから、バイクで七ヶ浜に搜索しに行ってみた。家は全部なくなっていて、避難所も回ってみたが、どこにも親戚はいなかった。諦めてバイクに乗ろうと思った瞬間、「病院」という単語が頭に降りてきた。それで病院に行ってみたところ、義理の兄とお袋が低体温症で入院していた。話を聞くと、地震があった直後、家に帰って、避難しようとするすると海の方から黒い壁のような波が押し寄せてきていた。それをみた瞬間に家の2階に避難してた瞬間に津波が家にぶつかった。家は2階だけが船の様に流されて、七ヶ浜の消防署のすぐそばで、それで助かった。



### ○当時の活動でトラウマになったこと

水中から木の枝が飛びでていて、手とか足に見えたこと。沈んでる前提で進んでいくからとても怖かった。

その後の消防団活動では、そのときのトラウマで活動が手につかなくなるということとはなかった。もう思い出さない様にしようと思っていた。

でも、精神的に病んでしまった人は消防団局員内にたくさんいた。活動が終わった後は1年くらい治療のための講習があった。誰がなってもおかしくない状態だった。

たまたま自分が見つけた人がいなかったから、そこまでひどくならなかった。でも見つけていたらきっと病んでしまっていたと思う。

でも、やはり3.11が来るたびに毎回憂鬱になってしまう。思い出したくないなあという様な感じ。

### ○出動した上で良かったこと・後悔していること

悪いことをすると悪いことが帰ってくる。逆にいいことをするといいことが自分に返ってくる。だから、この出動をしたことでその時の善行ができたんだと思う。それのお返しとして義理の兄もお袋も助かっていてくれたのではないかなと思っている。それが良かったこと。

後悔していることは、家のことをすぐにやってあげられなかったこと。

あとは、現場に来て、与えられた任務をしていたが、地元の人たちが、これやってくれないかと頼んでくる人が何人かいた。やってあげたかったけど、立場上それをやってあげることができなかったというのが心残り。あっちの方に家におじいさんいるはずだから探してくれという依頼だった。悲しそうな姿が頭に残っている。





### ○消防団員として、東日本大震災を経験する前後で心境の変化はあったか

変わったことはない。そもそも消防団員に入ったのは、人のためになろうと思ったからだ。それまでは悪いことばかりしていたから、本当に良くないなって自分を見つめ直した。それで28歳の時に今までの悪かったことを帳消しにできるくらい良いことをしようと思った。

元々は東京の本社に勤めており、その時から消防団に入っていた。30代の頃。それで転勤になってこっちに来ている。

だから、人のためにやるっていうのが今も前も同じ様にある。人のためにやらなきゃいけない。これが心にある。それが変わることはなかった。

### ○もし次に同じ様な災害で被害がでた時にどうするか

率先していく。あの時は嫌々だったけど、今そう思うのは、多分免疫がついたんだと思う。毎日ご遺体を扱っている人と同じ様な気がする。すぐに探しに行ってあげたい。もちろん怖いけど、それよりももっと早く探し出せる人を探してあげたい、助けてあげたいという気持ちが大きくなった。

### ○瓦礫の山などの震災の形跡は残しておくべきだと思うか

残してほしくない。震災遺構とかも全部残してほしくない。それを見るたびにあの日の風景を思い出してしまうから。だから早く復興してほしいなと思う。前と同じ様な風景が広がっているのは、嬉しいなと思う。少しでも傷跡が残っていたりすると、嫌だなんて思ってしまう。

### ○これから教員になる学生に向けて、消防団の立場から考えてほしいこと

相手の気持ちになって考えることをして欲しい。気持ちを汲み取って授業をすること。自分の気持ちじゃなくて、相手の気持ちを考えてやること。自分は後でいい。

子供には人の気持ちがわかる様な人に育ててほしい、育ててほしい。叩かれたら痛いっていうのはわかるでしょ？それがちゃんとわかる様な人間に育ててほしい。その人が大きくなるといけないんだから、その人を大きくしてあげればきっと自分も大きくなっていく。全員を底上げできればいい社会ができると思う。

それから、立場的に弱い人を助けてほしい。震災の経験からこれはとても思う。自分は次の次。

震災関連で津波のことを教えるのは、私がするのは微妙だなと思う。私は津波の思い出は消し去りたい。だからそういう話は語り部の人に聞くべきなんだと思う。消防団の人は忘れたい人がいっぱいいるに決まっている。

あとは、消防でも警察でも、関わってきた人たちに話を聞けばいいと思う。人に聞いて、「こんなひとだったんだ」というのを聞けば、わかるんだと思う。

### ○今回の調査について

最初このように話すということを聞いて、断れっていうふうに言っていた。理由は、おじいさんが昔満州に戦争に行っていて、でもおじいさんは戦争のことを一切畑さんたちにしなかった。その理由がやっとわかった。震災のことを話してって言われた時、当時のことを思い出してしまう。これはおじいさんの気持ちと同じだったんだと思うと認識した。きっと思い出したくなかったんだろう、私もおじいさんも。ただ、おじいさんは目の前で爆弾でなくなったりしたのを見ていたり、自分の命も危ないところでやっていたが、それに比べたら、我々は命の危険がなくご遺体を探していただけ。だからまだ、思い出してもなんとか立ち直れるかなと思って今回は話すことにした。

## 【A2班 坂口部長】

### ○搜索活動の動き

3月11日

東二番丁小学校の隣にある詰所で活動していた。夜の1時ごろに消防署から召集がかかり、翌日3月12日の朝5時に集合し、有志4名で荒浜地区へ向かうことになり、その一人が坂口さんだった。

「行かなきゃいけない」と思いすぐに手を挙げた。手を挙げ出動が決まった。後から嫌なものを見るんだろうなと少し抵抗は感じたが、やるしかないと使命感を感じた。嫌なものを見るかもしれないが受け止めたいという素直な気持ちで臨んだ。



3月12日

荒浜地区に着いたのは7時ごろだった。ジャンクションから荒浜地区に降りてきたが、東北自動車道から下側が全部海のようにになっていた。自動車道の下を通る通路から水が流れでていき、自動車道から見て両方ともに水が浸水していた。津波の本体は、東北道路の盛り土で止まっているという状態だった。東部道路の上から見ていて、車がもまれていて子供が砂場にミニカーを100台ほど入れ水をいれたような感じだった。中に人がいないかなと思った。この世のものとは思えない感じだった。現実の様に見えず、車がミニカーにしか見えなかった。匂いも海の匂いのような磯臭さがなく、泥の匂いだった。

始めに、そもそも人が降りる場所ではなかったなので、下に降りるための道を確認した。水が浸水しすぎてどこが道なのか溝なのか田んぼなのかわからない状態だった。

災害の36時間ルールというものがあり、人命救助を行う必要があった。「取り残された生存者がいないか探す」というような任務が下された。他の地域からきた消防団とシャッフルしながら5～6人の小隊を組み、チームごとに搜索にあたった。

## ○具体的な活動

搜索の方法は知らなかったため、指示通りに動いた。災害を主として活動していないため、搜索などの訓練は特にしていなかった。

建っている家を見つけて、片っ端から「誰かいませんか」と声を掛ける。いろんな方がいた。取り残されている人、茫然自失の人。

### 例 1)

木が生い茂っているところは津波で流されず、家が残っていた。そこには人がいた。瓦礫の山のようにになっていた。肌着のおじさんがいた。「大丈夫ですか？」という質問に対して「まあ大丈夫だけど」というような受け答えはされたがほとんど会話にならなかった。

「近くに避難所があるので避難していただけますか」というように伝えると「家も何も全部流されてしまったんだ」というように言われ、動けそうになかったので、二人でかついで道まで運んで行った。

### 例 2)

庭先で津波が止まっている家があった。8時だよ全員集合みたいな感じで家が断面になっていた。外から家の中が見えるようになっていた。

居間のこたつに入って、みかんを食べているおじさんがいた。どうしたらいいかわからない状態だった。そう言った人にも声をかけて回った。

### 例 3)

ショッキングな話ではあるが、屋上に残り残された人がいた。「大丈夫ですかから降りてきてください」と声をかけるも降りることができず、その人はパニックになって、屋根から飛び降りてしまった。幸い、下がまだ水であったため亡くなりはしなかった。自衛隊がボートを出して救出した。このように生き残っている方も冷静な判断ができないことが多かった。

ご遺体を発見することもあった。しかし、その日の任務は生存者を搜索することであったため、その日は仕方なく見てみぬふりをして、そのままにして生存者の搜索を続けた。





## ○ご遺体のお話

3月13日の捜索で5名のご遺体を発見した。ご遺体は見つけたくはないが、見つけてしまう。ご遺体はとても重く、5、6人がかりで運んだ。被災した家屋から毛布を見つけ出し、担架代わりにして運んだ。

ご遺体は見たくはないが、しょうがないと思いながら出した。ご遺体を運ぶ時は匂いは無く、重いだけだった。

生きている人を運ぶ時に足場が不安定で骨折をした。痛みが気になり病院に行った時には治りかけだった。その骨折がきっかけとなって内軟骨腫という病気が見つかり、手術をして治すことが出来た。

このような活動を消防団として参加するとは予想していなかった。

①きれいな女性の水死体だった。坂口さん自身、水死体を初めて見たという。カニが泡を吹くように白いものが風でゆらゆらしているのが見え、近づくと真っ白でキメの細かい泡を吹いて、沈んでた。

②津波で流れてきたバーに引っ掛かり、海老ぞりになった状態のご遺体。

③家の裏の用水路の土手のような場所で人がそのまま立った状態のご遺体。二本足で立っており、天を仰ぐようにして固まっていた。

④ジムニーの車から手が見えて、いるなと思った。しかし、車の屋根がなかったため、流されたと思った。運転席に男性の方がいたが、顔半分が全部なくなっていた。津波とともに流された家屋で顔半分がきれてしまい、顔がほぼない状態のご遺体。





### ○3月13日以降のお話

ゴールデンウィーク時に、重機がはいっての撤去の前にご遺体の搜索が再び行われた。もしご遺体が見つかったらバケツで運ぶと言われていた。遺体が遺体の形をしていないことを察し、いやだなと感じた。

がれきの山に頭を突っ込んで探した。すでに搜索した場所に旗が立っているのだが、そこをもう1度搜索した。出してあげたいけど、でてくるな、俺にあたるなという心情だった。結局、ご遺体を見つけることはなかった。

### ○PTSDのお話

日中は仕事、夜や休日は消防の活動を行っており、最初の一か月は何も感じなかったが、1か月後、夜にパッと目を覚ますと、自身にご遺体の状態で見つけた5人の方がそこに現れるようになった。この現象が1か月以上続いた。怖いとは思わなかった。これがPTSDかと感じた。今は特に同様の症状は現れていない。当時PTSDの症状が現れていないかの調査が行われていたが、周囲の人はどうであったかは分からない。



### ○出動を命じられた時のご家族のお話

当時は、奥さんと中1と小5のお子さんがいた。家の被害状況は街中なのでは被害はなく、金魚が水槽から出ていたくらいだった。

避難所に消防団の服を着て向かう際に「今日その格好でいたらみんなから頼りにされるよ。」と奥さんから言われた。東二番丁小学校には避難難民が1700人ほど集まっていた、作業をしているときは家族のことは忘れていた。深夜の1時・2時に荒浜への出動が決まり深夜仮眠を取りに家に帰ったときは奥さんは「行くんだろうな」と思ってくれていたと思う。また、子どもは消防団活動をしていることを知らなかったのかもしれないと思う。今生の別れではないので、あっさりとしている。

活動から帰宅した後に「大変だった」のような発言はしたが、どのようなご遺体を発見したなどの話は一切しなかった。

活動から帰宅した後は、泥だらけだがお風呂に入れないので軽く流し仕事に向かっていた。

### ○もう一度同じ災害が起き、出動しなければならなくなったら出動するか

出動する。しかし、1回経験したことによって「できる」と勘違いをし出しゃばらないよう気を付けなければいけない。みんなで活動をしているため、指揮系統のもとに動かなければうまくいかない。他の軍団と小隊を組み、小隊長が決まったらその人の指示に従い余計なことは言わない。

決められた秩序の中で動くことが大切。自衛隊との連携も難しい。消防は消防、自衛隊は自衛隊だと思っていたが、活動内容に秩序が出来たら搜索活動が順調に行くようになった。

### ○消防団と消防署の方は一緒に活動するのかどうか

小隊には消防署員がついている。消防署員が指示をしながら、消防団員は小隊長の指示に従う形でセットになって仕事をしている。団員はみんな素人なのでプロの指示に従う。

避難所も秩序が出来ていなければだめ。一人が出しゃばるのは良くないが複数人が進めていくべき。それは日ごろから地域のコミュニティがしっかりしていれば避難所が石詰め状態でもなんとか運営を進めることが可能になる。

震災当時に町内会長をしていた。上杉山通小学校が停電をされていて、発電機を手押しで持って行って体育館に電気をつけたら歓声があがり、神になった気分だった。





### ○教員として私たちに語り継いでいてほしいこと

自分の身は自分で守れるようにすること。ボランティアで人生が変わってしまうことがあるので、あえてボランティアなどの活動をしように思わなくていい。まずは、自分の命を自分で守れるようにした後に自分ができることを考えてほしい。与えられた事(生きるという事)をしっかりとこなしてほしい。

### ○まとめ

今回の経験は体験しようとしてもできないことなので現場に行き体験ができてよかった。災害の犠牲の厳しさを実感した。覚悟を持って活動に参加していたため、活動に参加したことに対する後悔はない。消防団の活動をやめたいと思ったことは何度もあるが、震災の活動が原因でやめようと思ったことは一度もない。

機会があれば、伝えたいという思いがあった。自分にとってすごく貴重な体験であった。人生観が変わる体験だった。



## B地点

活動日：3月27日



### B 1 班

島田 哲 副分団長

震災当時 33歳

当時在籍 3年目



### B 2 班

佐藤 雅士 部長

震災当時 39歳

当時在籍 1年目



## 【島田副分団長、佐藤部長 共通する内容】

### ○具体的な活動内容

午前9時頃に詰所を出発・移動して、10時頃に搜索開始、午後2時頃まで搜索を行った。

場所と範囲が決められていて、20名くらいのチームでまとまって移動するような感じだった。

活動が3月27日だから、いわゆる発災後72時間と言われている生命の危険性の時間を過ぎた時間だった。だから、生存者を探すという業務ではなく、ご遺体を探す、行方不明者を探すという活動が主となった。そのため、生きている人を何とかして見つけ出そうという心づもりで行ったわけではなかった。翌日に行った人たちは、生きている人を何とか見つけだそうという心づもりだったはず。私たちは、音がないところで物をかき分けて、その中にご遺体があるかないかを探す。翌日に行った人とは活動内容がだいぶ違った。

活動の当日は、仙台から車で来て、道路に車を止めて、ここ（聞き取り調査時のB地点）からちょっと行ったところにあった沼のあたりをメインに活動していた。その時にご遺体は見つけれなかった。トビという道具（鉤のついた長い棒）で瓦礫をかきわけていくと、家財道具がいっぱい出てくる。アルバムとか、郵便物とか。そういう個人情報を書かれたものは、わかりやすいところに置いておいた。でもそれがメイン活動ではないから、それもやるけど、メインは少しでも下をすくってご遺体を見つけてあげること。それが1番の活動だった。

瓦礫が溜まっているような場所は、何層にも瓦礫が積み重なっていたから、ある程度まとまった人数で、「この瓦礫寄せましょう」といって瓦礫を寄せながら、何かないか搜索していた。

震災から2週間ほど経っていたので、活動中に地震はなかったし、緊急地震速報が鳴ることもなかった。

震災後の搜索活動の派遣は、中央分団からは、1週間に2回くらい、4月中旬頃まで荒浜に搜索活動に行っていた(緊急消防援助隊が来ているうちは行っていた)。当時いたメンバーは、1人1回くらいは行っている。





## ○荒浜地区の様子

震災発生から2週間以上経過していたため、道路の啓開は済んでいた。緊急車両や捜索に行くための最低限の啓開は、地元の業者さんや自衛隊とかがしてくれていた。

辺りの状況としては、家の瓦礫などの木材が流されてきていた。瓦礫が溜まりやすい場所と溜まりにくい場所があって、瓦礫がない場所は津波が引けないから水浸しだった。そのため、ゴム長などを履いて活動を行った。

消防はご遺体に直接触ったりはできないから、印をつけて自衛隊に場所を教えていた。例えば、崩れた家に「女性↓」と書かれていて、ご遺体のあった場所が記されていた。活動したのが発災から2週間たった後で、ご遺体はほとんどなかったから、私たちが来たときはどこにいたかという印だけ残っていた。

## ○アフターケアについて

ご遺体の捜索は、ご遺体を直接見ることに慣れていなくてPTSDになったりする場合もあるから、仙台市の消防の方でアフターケアとして、捜索に関わられた方はカウンセリングを受けさせてもらっていた。私たちはご遺体を見てないから行ってないけど。精神的につらい思いをした方が多かったから、アフターケアとして仙台市のほうで行ってくれていた。中央分団では立ち直れなかった人はいないと思う。



## 【B 1 班 島田副分団長】

### ○荒浜地区について

友人（二瓶さん）が住んでいたため、荒浜地区は昔からよく知っている場所だった。子どもの頃は、初日の出もよく見に来た場所だった。家族行事として毎年歩いていたため、慣れ親しんだ土地だった。

来た時の印象としては、思ったよりも片付いているなという印象だった。道路の脇にはゴミもあったが、車が通るところに関してはアスファルトがしっかり見えていた。思ったよりきれいだなと感じた。

匂いは、海の塩臭い匂いだったと思う。記憶にそんなに残ってないから、強烈な匂いではなかったのではないかな。

しかし、東道路を超えると茶色い世界が広がっていて、違う世界に来たようで「ぞわっ」とした。車や人などの生活の音が一切聞こえなかった。

活動が終わってから海の方に行ってみたら、その集落が本当になくなってしまって、なにもなくなってしまうことにショックを受けた。



### ○搜索活動中の思い

搜索中は、「生きている」という考えは無かったが、「見つけたい」という思いで搜索していた。2週間経過していてニュースや新聞で色々な写真や情報が入ってきていたため、「慣れ」という感覚もあった。

自分たちはご遺体を発見できなかったが、4月にもう1回、若林団地の手前の方に搜索に行ったときに、私じゃないけど、他で活動していた人が1人見つけて、警察を呼んで搬送されたということがあった。搜索に行く前は、死体を見る可能性があるということで、恐怖とかもあったんですね。怖いし。見た目はグロいし。やっぱり匂いもあるし。自分がそれを直視できるかという恐れはあったけど、でもやっぱり見つかったって聞いたときには、良かったなと思いました。その思いの方が勝ちました。みなさんもその時になれば、頭の中のいろんな不安とかが考えられないくらい目の前のことをやるしかないという状況になると思う。

### ○搜索活動の中で最も印象に残っている瞬間

ほぼ海のようになっていた。その中に消防車が一台横倒しになっていて、その光景が一番初めに目の前にあった景色だったため、とてもショックだった。また、荒浜の住宅地では同じ苗字の方々が固まっていて、「二瓶」という名字が多かった。自分の友人も二瓶という名字であったため、二瓶と記載された個人の所有物を発掘するたびに心配する思いで搜索していた。震災から半年後、友人の二瓶さんは、諸事情により震災前に引っ越していたため無事ということが発覚し、安心した。

荒浜の搜索活動の前だと、仙台市内にある避難所のお手伝いをしていて、その活動中に、荒浜から帰ってきた消防団員から荒浜地区の様子を聞いた。衝撃的だったのは、産業廃棄物の近くの電柱のところに昔は緑のネットがはってあって、その上に1人引っかかっていたって聞いたときにすごくショックを受けた。そんなに波が来たのかと。

### ○危険性がある中、普段と違う場所で活動することに対して

荒浜地区に搜索に来ることに抵抗はなかったし、「いやだな」「怖いな」という感情もなかった。普通の業務の一環であり、日常の活動の一部として勤めていた。

家族の反応としても、親も自分も良い年だったため、止められることもなかった。しかし、最初に福島原発が爆発した時は、誰もその情報がわからない状況だったため、親も心配している様子だった。当時は銀色の防火服を着て家に帰って脱いでポリ袋に入れるということをしていた。





### ○実際に活動をしている中で、消防士と協力した場面はあったか

活動している人数は、消防職員よりも消防団員の方が多かった。団員10人あたり職員1～2人、エリア的に言うと5人に1人くらいだった。職員は特殊工具を持っているため、チェーンソーなどを使って大きい家の中に入る等の作業をしていた。団員は、危険性をあまり伴わないような、溜まっていた瓦礫をどける単純作業をしていた。危険性のある作業は、職員が行っていた。そのため、あまり連携する作業はなかった。

職員と関わった場面としては、当時はガスボンベがたくさん転がっていて、10日経っても未だに『シューシュー』という音をたてていて、引火爆発の危険があったため、見つけたら職員を読んで対処してもらっていた。



## ○消防団としての、搜索活動以外の活動

13日・14日頃に火災が1件発生した。それが自分の家の向かい側で起こったものだった。活動としては普段の活動と変わらず、消防団員は人除けがメインだった。

また、避難所運営のお手伝いも行った。中央分団の詰所が東二番丁小学校の敷地内であったため、その避難所をメインで担当していて、活動中も避難所について考えることが多かった。仕事復帰する人も多かったため、人の分配や搜索に行ける日の調整を分団長と話し合いながら行っていた。当時は搜索活動にあまり重きを置いていなかった。大変だったのは、自分たちよりもその当時の分団長、副分団長だったと思う。

避難所は人対人だから、イレギュラーが起きる。私が東二番丁小学校の避難所のお手伝いをしていた時で、1番大変だったのは食ですね。アルファ米の用意は出来ていたが、それを誰が作って提供するのかという問題があった。学校の先生は他にやることがいっぱいあって、避難所運営はおまけ。第一にすることは生徒の安全確認と学校の被害の確認。それをしたうえで避難所のこととなるので、大変だと思う。

どんなに心構えがあったとしてもイレギュラーは起きる。冗談だろってような人もいますから。「牛肉が食いたい」とか「ベッドをよこせ」とか「炊飯器を家から持ってきたからコンセント使わせろ」とか「個室にしろ」とか。どこからそんな感覚になるのかなって人もいっぱいいた。何を言っているんだろって思うけど、そういう人たちは本気で言ってる。どこかで線引きはしないとだし、それらに全て100%で対応していると大変すぎるので、みなさんはそこはうまく上司を盾にして逃げるのがいいかな。ただ、そういう人は弱い人を見つけてこの人には言えるなって人に集中的に行きますから、そこは上手く流すテクニックが必要かな。それは避難所運営に限らないのかもしれないけど。

基本的に、消防団は各避難所に必ずいる訳ではなくて、東二番丁小学校はたまたま隣に消防団の詰所があったからお手伝いをした。運営するのは、仙台市の学校であつたら仙台市。ありえるのはコミュニティセンター。消防とか警察の支援はあまりあてにしない方がいい。学校が避難所になることが多いから、やっぱり最初は矢面に立つのは学校の先生。時間帯によっては、施錠・開錠の問題もある。学校の先生は本当に大変だったと思う。



### ○震災の前後で消防団の活動に対する変化はあったか

震災を経験したことは、新しい年代の人たちに経験として「こういうことがあったんだよ」と伝えられることがいいことだと思っている。

震災で変わったことは特にはないが、震災によって消防団の国からの扱いが変わったことが良かったと思う。装備が変わって新しいものが入ってきたことがうれしかった。すぐに救命胴衣が配備され、そのあとに新しい靴が入ってくるなどちょっとした新しいものが増えていった。

また、避難所などで普段の業務とは違うイレギュラーな活動を約1か月間していく中で、分団員の良い面や悪い面が見えて、今まで気づけなかったところが見えた。中には、その影響で分団を離れた人もいる。

### ○家族から反対されて捜索にいけなかった人はいたか

諸事情で行けなかった人はいたが、家族からの反対でいけなかったという人はいなかった。また、それに対する非難の声などもなかったし、個人的にもそんなに気にしていなかった。

### ○活動後に立ち直れなくなってしまった人はいたのか

中央分団では震災をきっかけに退団をしたり、精神的に苦しんだりしている人はいなかった。震災で母親を亡くした人はいたが、その人も気丈に振る舞い、特に活動に影響はなく、その後も団に在籍している。仙台市内の団員でそういったことで退団をしたり、精神的に追い込まれたりした人の話は聞いたことが無い。



### ○今でも震災当時の記憶を思い出すことはあるのか

ある。震災当時の話を聞かれることもあり、そういったときにその都度思い出す。また、普段からYouTubeなどで災害についての動画を見ることも多いので、よく思い出す。

### ○教員として私たちに語り継いでいてほしいこと

語り継ぐってどうしても伝言ゲームになってしまう。インターネットを利用して震災の映像を見続けることが大切だ。小学校で防災教育をするということは、相当苦勞すると思う。経験者の話を聞かせたりしてもあまり響かないと思うから、教員が間に入ってかみ砕いて教えることができるかどうかが重要。

大事なものは、次に備えていくこと。あの時どうだった、こうだったという過去のことは正直そんなに重要ではない。次に同じことが起きたとき、どうやって命を守っていくのか、自分たちもそうだし、教員ならば子供たちをどうやって守るのか考えることが大切。経験しないと子どもたちに備えると教えることはできないと思う。映像を見せてトラウマを植え付けるレベルのことをしなければ、危機感を持たないのではないかな。今、東日本大震災のときと同じ状況になったら、人々はまた同じような状況を繰り返してしまうのではないかな。それでもやっていかなければならないのが防災。教員は教え続けるしかない。



## 【B 2 班 佐藤部長】

### ○震災後の消防団活動について

私は震災後に初めて消防団としての活動をしたのが3月27日で、荒浜地区での搜索活動だった。消防団員である前に企業に所属している身なので、やはり仕事が優先だった。

私が荒浜で活動したのは、この1回のみだった。



### ○荒浜地区に来た時の印象

仕事が建設関連業（建設業で建設を行うために計画を立てたり、設計図を書いたりという、建設コンサルタントと言われる仕事）で、次の日からいろいろな現場の調査に行っていた。だから、消防団として荒浜に来る前にこういう光景はたくさん見ていた。そのため、「ここもこうなんだ」というのが率直な感想。でも、1つここが特徴的だったのは、東部道路のところで波が止まったから、瓦礫もそこでストップしていた。だから、あの道路でアンダーボックスをくぐった瞬間に、「こっちだけやたら茶色いな」というのは覚えている。瓦礫の木材の色しかないから。道路をくぐる前は、建物とかまだあったけど、アンダーボックスくぐった瞬間に、「あ、茶色だ」というのはすごい印象に残っている。瓦礫がこんなにたまっちゃってんだなって。瓦礫の多さが印象的で、車がいろんなところに横転していたり、高いところに引っかかっていたり、建物の屋根の上にあったり、目で見えるものの衝撃が印象的だった。「えっ」と言うくらい。

津波の被災地を初めて見た時の印象としては、いわき方面に調査に行った際に現場を初めて見て、「はっ、なにもない。茶色い。ここに建物あったはずなのになくなって。」となった。



### ○普段と違う場所で活動することに対して

消防団に入っている以上は、管轄内での活動がメインだけど、例えば大規模な火災が起きた際には隣接する管轄の消防団に応援に来てもらうこともある。だから、日本規模の災害だったから、要請が来るだろうなとある程度は予想はしていたし、そこはあまり抵抗はなかった。「誰か派遣してください」「はい、いけますよ。」って感じで何も抵抗はなかった。

家族の反応としても、消防団に入っているのはわかっているから、「捜索行ってくるね」と言うのと「がんばってね」と送り出してくれた。普通に、「活動してきます」「いってらっしゃい」というようなくらい。住んでいた場所が台原で地盤の固い場所だったから、被害はそんなになく、27日だと電気も水道も通じていて、ほとんど普通の生活だったからというのもあると思う。緊急地震速報の頻度も減ってきていたから、鳴ったらすぐ逃げてねとかそこまでの状態ではなかったし。

慣れない場所での活動ってことに関しては、津波に流されちゃうとこの地域の人にとっても、自分のところであって自分のところでないと思う。荒浜地区は震災前には海水浴場とかあったし、ドライブとかでも数回は来たことはあったが、そこまで思い入れがあったわけではなくてあまり覚えていないけど、なんとなく何もなくなっちゃったなという印象はあった。



## ○消防団が活動している隣で、行方不明の方のご家族が搜索していることはあったか

当時は、消防や自衛隊、警察がいっぱい入っていたから、ご家族の搜索されている人の区別はできなかった。でも、多分ここは大規模な搜索が入ったから、一緒にはいなかったと思う。設備もないし、着の身着のまま避難されていたから、釘が落ちてたりプロパンガスがビューと漏れているような状況だったから、装備なしで搜索できるような状況ではまだなかった。近くで見守っていたかもしれないけれど、本人たちも当時はまだそういう状況でなかったり、避難所に連絡くださいとか書いて連絡が来るのを待っている状況だったから、その当時現場に入ってまでという人はあまりいなかったと思う。

## ○震災当日

震災当日は、消防団の活動ではなく、仕事をしていた。お客さんにメールで資料送って、電話して、電話終わった直後くらいに地震があった。長かったし、会社の電気が消えたから、やばいなと思った。机の下に隠れていた。

情報収集しようにも電源が切れていてできなかった。まずは会社の社屋内の被害がないかを確認して、とりあえずみんな外に出て避難した。その時雪が降ってきて、15時くらいだったし、みんな自分の家が心配だろうから、そこで解散した。

私は奥さんが働いてて、海岸線のほうの現場に行っていた。子どもたちは保育園に預けていた。その2か所と連絡を取りたかったが、取れなかった。とりあえず会社に戻ってきて、携帯で連絡しながら「今どこにいる？」って。最終的には会社の車で長町の保育園まで迎えに行って、私は会社に戻ってきて、会社のある錦町で奥さんと合流して、しばらくそこで滞在して、家に帰った。

停電だったから、ノートパソコンとか、会社でもらったクラッカーとか、奥さんが帰りがけに買ったパンとかで過ごした。

## ○避難所

避難所になる場所はもともと決まっていた、それに消防団も協力するような形。私たちのところだと東二番丁小学校だった。青葉中央分団の詰所が隣にあったから、そこも使いながら運営してた。

内容としては、配給されたものを配ったり、教室を開放するからその部屋割りなど。やることがすべて決まっていたわけではないから、何かあったら対応していく形だった。あとは、仙台市から避難所閉めますっていわれたら閉める。

都市部の避難所だったから、家が崩れたとか流されたとかで長期的に避難所にいるってことじゃなくて、短期で避難していた人がほとんどだったから、沿岸部と比べると比較的大変じゃなかったと思う。

街中だから、ダイエーっていうスーパーがあって（現在のイオン）、生鮮食品を卸しに来た業者とかがダイエーが閉まってて卸せなくて、持って帰ったら腐らせるだけだから近くの避難所に置いていった。だから、刺身とか当時の分団長が捌いて避難所で食べてた。当日直後の物流は集中してたから、街中だとそういうメリットもある。でも、台原とか地下鉄で2つか3つ行ったところにはおにぎりとかクラッカーとかしかなかった。

避難所では、小中学生が協力的でたくさん動いてくれたのが印象に残っていて、「これ配って」とかお願いしたことをすぐにやってくれた。自分のやりたいことじゃなくてもやってたし、「やだ」とか「何が食べたい」とかわがまま言うこともなかった。言われたことは協力するっていうのが学校で自然と身に付いていたのかなと思う。すごく感心した。1番頼りになったというか、力になった。たまたまかもしれないけど、むしろお年寄りのほうが動かなかったりわがまま言ったりしてた。





## ○ゼミ生へ

将来先生になりたい学生が多いから、配属される地域によるけど、何か災害があったときはやっぱり1番は身を守ることが大事。自分の身も生徒の身も守ることが最優先だと思う。他には、判断することと事前の準備が大事。何かあった時にすぐ行動できるように、考えておくことは必要。よく言われるのは、準備したものしか役に立たない、準備したものですら足りないということ。



## 総括

私たちはこれまで宮城県沿岸部の被災地を訪れ、宮城県沿岸部の被災状況、被災された方からの聴き取り調査を中心に行ってきた。しかし、今回は仙台市内で被災された方を救助する立場になった消防団員の方からの聴き取り調査を行い、救助する立場にある方々の思いや願いに触れ、今後教員という子どもの命を守る立場に立つ私たちが大切にしたい行動や心構えについて学ぶことができた。

今回の調査で、ゼミ生が共通して学ぶことができた実感したことは、命を助けるということへの使命感である。救助活動を行った地域は、日頃から活動を行っている地域ではなく、被害が大きい管轄外の地域であったため、ご自身の家族のもとを離れ、消防団として活動を行ったというお話を聞き、ご自身の家族を心配に思いながらも消防団員として多くの命を助けなければいけないという消防団員としての使命を全うしたという事実に関心を打たれた。

また、ご遺体の搜索活動を行い、実際にご遺体をご覧になったという方に対して、「今後同じようなことが起こったとしても出動したいと思うか。」について質問したところ、「出動する。」と即答されていたことから、消防団員としてできることをするだけだという強い意志を感じた。

私たちが今後教壇に立ったとき、消防団員の方々と同じように、自分の目の前にいる子どもたちの命を、私が守らなければいけないという使命感を一人ひとりが持ち、日々子どもたちと生活していく必要があると学ぶことができた。

なお、この聴き取り調査に参加した西美佐緒、千葉奈々子の二人が消防団活動に共感し、中央分団に入団し、消防団員になった。

## 大学院生 佐藤 駿

私はこれまで3.11ゼミで宮城県石巻市の多くの被災地を見て、その場で震災にあった人の話を聞き取るということを行なってきました。しかしこれまで震災にあった人を救助してきた人の話を聞くことはありませんでした。そこで、今回消防団の方の話を初めて聞くことによって、あの日多くの人の命を助けるのに尽力した方側の人のその時の気持ちを聞くことができました。そこで特に印象的だったのは、田んぼの中を鳶口を使って遺体を探していた時の話でした。そこでは探す際に頼むから自分のところからは見つからないでくれと、怯えていたという話を聞くことができました。救助する人にももちろん恐怖心というものがあり、それがあながらも懸命に救助活動を行ってくださっていたということについてとても感銘を受けました。また、最後に言われた、何か一つでも人のためになることをしてくださいという言葉は災害時に周りの人を助けるという意味でもあり、日常的に共同して生活していく中で最も大切な心構えなのではないかと思いました。私はこれまで被災を受けた側の人のお話しか聞いてこなかったため、助ける側の人とはどのような気持ちなのかということとはあまりわかりませんでした。ですが、助ける側の人と同じく家族がいて、同じ宮城県の中にいて同じ恐怖心を持って戦っていたということがわかりました。このことを受け、これから教壇に立ち防災の話をする際には、どのような災害が起きていたのかということ伝えることはもちろん、そこで救助という活動を行っていた人々のことについても詳しく触れて、そこから実際に災害が起きた際は自分の命の安全が確保できたら、できるだけ周りの人を助けることができるような大人に育ってもらえるように指導していきたいなと思います。





## 大学院生 鈴木隆宏

大学時代は、防災教育として311ゼミに携わらせていただいたが、今年は被災地実情班で活動させていただいた。ゼミへの参加が難しく、現地調査への参加のみであったが、貴重な話をお聞きすることができた。震災当時の消防士の体験談や閑上の長沼さんのお話をお伺いし、14年が経とうとしている現在においても、被災した方の心に残り続けているものや心情の変化に触れることができた。

特に印象的だったのは、「復興が終わっていない」ということ。公表としての復興達成宣言が出されたものの、住民の中には戻らない景色や文化、人々の暮らしがあるという話をお聞きし、簡単に復興という言葉を使うべきではないのではないかと考えた。

また、教員となってからも現実の全てを伝えることは難しいものの、語り部や被災体験をした方の話を聞いて、子どもに伝えていって欲しいという言葉いただいた。その言葉を胸に、教員として働いてからも伝え続けることを大切にして自身の学びを深めていきたい。



## 理科コース4年 船山雄太

今回の311ゼミの仙台市青葉消防団の聞き取り調査にあっては主に運営側として各種調整等に当たった。今回の調査を通して発災当時から在籍している先輩団員からお聞きする内容から学ぶこと考えることは多くあった。

消防団員として約3年間在職したがなかなか聞く機会もなく良い経験になったと思う。また3年間の消防団活動を通して20回を超える緊急出場と100回を超える訓練・会議での出場などを通して様々なことを学んだ。

今回の一連の消防団への聞き取りでは学生ではなかなか学べないことを学べる機会として宮教大生に消防団を紹介できたことも大きな成果だと思う。



## 数学教育専攻4年 在原真優

消防団として被災地で活動されてた方のお話を聞きするのが初めてだったため、とても貴重な経験になりました。

今までは仙台市外の沿岸の地域に焦点を当てて聴き取り調査などを行ってきたため、仙台市の都市部からも近い地域で大きな被害があったこと、都市部からも消防団の方が派遣されて搜索活動が行われていたことなど、初めて知ることばかりでした。住んでいた場所ではなく、普段の消防団の活動とも違った場所で活動されたということで、自分自身のことや家族、仕事なども大変な中で使命感を持って活動されていた印象を受けました。

実際に現地に行き写真を見ながらお話を聞くことで、道路から海側で急にがれきが増えたことや、ご遺体の場所を示す文字など、当時の様子をイメージできたり、震災前・震災直後・現在の3つを比べて考えながらお話を聞くことができました。仙台近郊での被災について考える機会になり、大都市での災害について学ぶことができました。



## 理科コース4年 小野崎彩菜

これまでの現地視察では、主にその土地の被災者の方々や当時学校に居た教員を対象として聴き取り調査を行ってきた。4年間で最後の視察だった今年は、被災地の最前線で救助活動にあたった消防団の方々の話を聴くことができ、様々な立場から東日本大震災を見つめる土台を得ることができたと思う。

消防団の方々は自らも被災者でありながら、非日常で悲惨で時に危険と隣り合わせの現場に足を踏み入れ懸命に活動していたことを想像し、その大きな使命感に心を打たれた。自分の家族のこと、見守ってきた地域の現状に様々な思いを抱えながらも、ご遺体を探すこと、家財やアルバムを探すことなど目の前のことにとにかく必死だったことを感じた。

この話を聴いて、私がこれからできることはやはり次世代に伝え続けることだと思った。震災当時様々な立場にいた方々の、それぞれの体験や思いを直接聴いてきた私だからこそ、子どもたちに伝えられることがあると思う。今回の視察を通して、被災地の思いや教訓と、これからを生きる子どもたちとの橋渡しをする存在になりたいとまた強く思った。



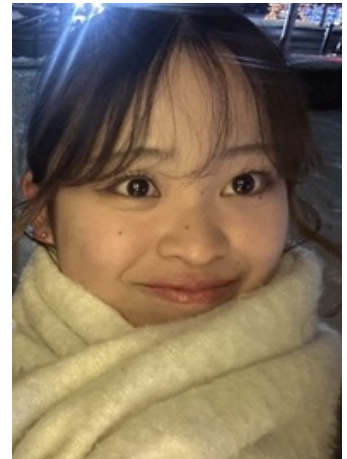
## 未来づくり教育創生コース3年 阿部志帆

今回消防団の方の話を聞いて、想定していなかった活動場所・活動内容であっても、その地域に住む人々を思って活動する消防団員の方の強い責任感や忍耐力に圧倒された。私は今回坂口さんのお話を中心に聞いたのだが、一番印象的だった話は実際にご覧になった御遺体の話である。

これまで聞いたことがないリアルな御遺体の状態を想像し、とても心苦しくなった。特に、顔の半分が切れた状態の御遺体を見たという話は、自分の想像の域を超えた状態の御遺体で、もし自分が同じ状況に立っていたら、救助活動を継続できないと思うが、その後も消防団としての使命を貫き通し、活動を継続してきた坂口さんの勇ましさに心を打たれた。

また、もう一度同じような災害が起き、出動しなければならなくなった場合、出動するか尋ねたところ、出動すると即答していた姿も印象的であった。今回の東日本大震災での消防団活動がトラウマになっていたとしても、地域住民のために自分が助ける、自分が行動するという意思を強く感じ、自分自身も子どもたちの命を守る立場になるものとして、指示を待つのではなく、自分自身でどう行動するべきなのか考え、積極的に行動する意識を持つことが大切であると感じた。

今回の貴重な経験を踏まえ、強い責任感や忍耐力を備えた子どもたちから信頼される教員になりたいと強く思うことができた。



## 未来づくり教育創生コース3年 高橋輝良々

今回の視察を通して、改めて、東日本大地震の被害の大きさ、そして、自分にも何かできることがあると信じ、行動に移すことの勇氣と責任について考えさせられました。

私は、被災地の中で生活を送り、たくさんの大人から被災地の様子を聞いていたため、被災直後の町がどのような状態なのかについて分かった気でいました。しかし、震災の次の日から救助に入った消防団の方たちが見た景色と感じた辛さは、私の想像を遥かに超えていました。特に、ご遺体を見つけてあげたい気持ちと、でも、見つけたくないという心の葛藤を聞いた時は、本当に胸が苦しくなりました。これまで、震災が起きてから瓦礫の撤去など町の復興のために動いてくれた方々は、強い人たちなんだろうと思っていましたが、その方たちにしか分からない苦しさの中で、私たちのために動いてくださっていたことに気づくことができました。

今回の視察で新しい視点で震災を振り返り、次に災害が起きてしまったとき、地域のために自分にできることは何か、教師として子どもたちにできることは何か、常に考えながら生活したいと思います。そして、復興を目指して立ち上がり、行動に移すことのできる人でありたいです。





## 初等教育専攻 1 年 小山七海

私は沿岸部の被災状況しか知らなかったが、今回の視察を通して都市部の状況を知ることができた。被災した荒浜の様子を見て、企業の施設や震災遺構のみが存在している状況を見て、人が住めなくなってしまった土地が今どのようなになっているのかを知り、フルーツパークを作ったりと人が住めなくても土地をポジティブに活用していることを学んだ。一方で、荒浜小学校や慰霊碑、荒浜海水浴場から見た景色などから、都市に近い場所でもまだ震災の名残を感じられることに驚いた。また、都市部、沿岸部関係なくどちらもまだまだ復興の途中なのだと感じた。

行方不明者の搜索活動について自衛隊の話はよく耳にするが、消防団の活動については知らなかったため、災害発生後の対応について知るとてもよい機会になった。私が話を聞いた方は、発災から時間が経って搜索した方であったため、生存者ではなく遺体を探すつもりで活動なさっていたが助けたいという思いがあったことを知り、実際に人が見つかったときは衝撃だったが、見つかってよかったと思ったという話を聞いて、遺体を探すことは想像するだけでも怖いと思うが、その人が見つかって安心する人がいると思うと、とても重要な活動なのだと感じた。

消防団には当時、相互のやりとりができる通信機器がなかったことを知り、何か物事が起きたことで、今の体制の直すべき点が見えてくることを学んだ。今をよりよくするために過去のことを知り、今に生かしていきたいと思った。



## 初等教育専攻 1 年 葛西果帆

初めて視察に行って、東日本大震災の被害が大きかった関上での消防団の方のお話を聞くことが出来てよかったです。実際にお話を聞いて、リアルな体験を聞くことで改めて震災の恐ろしさを感じました。

特に震災の時に、家族を置いて消防のほうに出勤しなければならなかったり、木の枝が人の手に見えたりしていたと仰っていて、そのときのいろいろな感情がこちらにも伝わってきました。それでも消防団を辞めずに、もっと人を助けたいという気持ちがとてもかっこいいと思いました。

お話を聞いて、やっぱり語り部は重要なのだと思いました。今の子どもたちは東日本大震災を経験していないので、恐ろしさを伝えることは難しいと思います。だから、今回お聞きしたような体験談を交えたり、実際に被災地に赴いたりすることで伝えていけるのではないかと思います。いつ来るかわからない震災に日ごろから備えて、被害をできるだけ大きくしないように私も気を付けたいと思いました。



## 初等教育専攻1年 高木 那々実

今回、東日本大震災当時に消防団として活動した方々にお話しを聞き、消防団の活動を知るだけでなく活動中に感じていたことなどの当事者にしか感じることをできないことをお聞きすることができ、とても有意義な時間になりました。実際の場所でお話を聞いたことで震災から時間がたった後にどのような活動をしたのかを身近に感じながら活動した方々にお話を聞くことができました。

震災から時間がたっていたということでご遺体を探したりする活動はメインではなかったとおっしゃっていましたが当時の写真と比べたりしながら被災の状況や働いていて深く関わりのあるインフラについてもお話していただき行政が出しているよりも詳しい当時の状況を知ることができました。特に「準備していたものしか役に立たない」という言葉が印象に残っています。全てを賄える準備はなくとも少しでも被害を減らすためにはできる限りの準備をすることが大切なのだと感じました。

私は学校現場において完璧な行動は不可能に近いと考えています。それでも準備を悪事都にできる限り行い子どもの命を守れるような教員になりたいと思いました。



## 初等教育専攻1年 千葉奈々子

今回の消防団視察では、東日本大震災発災の1か月後に被災地に赴いたという方々のお話を伺った。まず、震災において救助活動に尽力したのは、自衛隊員や救急救命士などの人命救助が本業の人だけだという意識が今まであったが、地域の消防団員が捜索などを行っていたことを今回の活動で初めて知った。

担当してくださった佐藤さんに、自分が内陸出身であることをお伝えした時、「本当の地震の怖さは下からくる」とお話ししてくださったのが印象に残っている。今まで、沿岸の様々な被災地について学んできたが、内陸に住む私にとっては、沿岸で起こった様々な出来事も、これからの防災も、どうしても自分ごととしてとらえられないような感じが抜けずに活動してきた。そのため、この言葉が初めて内陸の防災についてのことを意識したきっかけの一つともなった。将来は、内陸の地元で教員として働きたいので、内陸の学校では防災・減災のためにどのような活動をするべきか本格的に考えていきたいと思う。また、発災時に、当時の職場のマニュアルは完全に机上のものであったため、臨機応変に対応することが大切であり、そのためには様々な経験が必要であると感じたというお話も伺った。これは学校現場にとっても防災に限らず必要な意識であると思う。防災を様々なものと結び付け発展させて考えていくためにも、これからいろいろな経験をしたいと思う。



## 初等教育専攻 1 年 千葉雄翔

特に印象に残ったエピソードは、目の前に現実とは思えない光景が広がっていたというものでした。津波に流されて亡くなった人たちのご遺体をいくつも見たと聞いたときは、とても胸が痛くなりました。映像などで猛威を振るう津波の光景は見ますが、その津波に流されてしまった人たちがその後どうなったかというのは見たことがありません。

想像もしたくないほど悲惨なのだろうと思っていましたが、実際にそれを見た消防団の方々の話を聞くと予想以上に悲惨なものでした。思い出したくない記憶を話していただくことは、私の胸に深く刻まれました。

それから、消防団員としての任務を覚悟をもって果たしているという話を聞き、憧れに似たような気持ちが湧きました。被害の大きさに違いがあるにしろ、自分や家族も震災被害を受けているはずです。そんな時でも助けを必要としている誰かのために、一步を踏み出す勇気に胸を打たれました。自分だったらこの場面に遭遇した時、動き出せるのだろうかと思いました。ですが、消防団の方々は自分の命を守ることが一番大切だとおっしゃっていました。その上で誰かを助けに行けるほどに自分も強くなりたいと感じました。将来教員になったときに、災害時に活躍している人たちのことをどう伝えるかを考えるとともに、消防団に入団するかどうかを考えていきたいと思います。



## 初等教育専攻 1 年 西 美佐緒

消防団の方々から震災当時の話を伺い、そのお話は細やかな描写や感情を交えて語られ、生々しさと緊迫感が強く伝わってきました。その具体例は想像を絶する内容ばかりでした。どれだけ厳しい状況の中で活動していたのかを想像するだけで胸が締め付けられるような気持ちになりました。家族の安否を気にしながらも、目の前の人々を助けるために全力を尽くしていた姿は本当に尊く、尊敬の念を抱かずにはいられませんでした。

また、「同じような災害が起きたらどうしますか？」という問いに対し、迷わず行くと即答されたその姿勢には、本物の覚悟と責任感を感じました。その言葉の重みは、震災時の壮絶な経験を背負いながらも、それを自分の使命として受け入れている強さそのものでした。その姿勢に触れる中で、自分も人のために動きたいという気持ちが強く芽生えました。その思いから、私は消防団員として新たな一步を踏み出す決意をしました。これからは、あの尊敬する消防団員の方々のように、困難な状況でも冷静で力強い行動や言動ができる人になりたいと思います。この経験を胸に、自分も誰かの力になれる存在を目指して成長していきます。また教員になった際や教員としてすべきこともお話しいただいたためその内容を心に深く刻み、将来の夢に向かってこれからも頑張っていきたいと思います。





## 初等教育専攻1年 福岡加彩

実際に消防団として活動されている方のお話を聞き、東日本大震災当時どのような役割が消防団員としてあったのか、会社の一員としてあったのか様々な立場から誰かを守ったお話を聞くことができました。

実際に被災地へ赴き瓦礫の撤去作業を行う中でご遺体を見てしまいPTSDになってしまう方もいたというお話から自分が精神的に苦しんでしまう状況もさながら使命感の中で活動されていたのだなという印象を受けました。また、すぐには現地に赴かなくとも、学校の避難所運営の補助を行っていたり会社の一員として被災地の状況を翌日から視察しに行き震災当時の状況について伝えていこうとしていたり様々な面から震災、被災について向き合っていたことが分かりました。

実際に現地でお話を聞いたことで震災後当時の状況について鮮明にイメージすることができました。お話を聞いて純粹に消防団員の方々がカッコいいと思うとともに様々な立場の人が震災の時に活動してくださることを伝えていきたいと感じました。



## 初等教育専攻1年 丸山雛奈

今回、311ゼミの活動として、地域の消防団の方々にお話を伺う機会をいただき、大変貴重な学びを得ました。私は震災当時、宮城県の内陸部に住んでいて、津波の被害を直接体験することはありませんでした。しかし、被災地を訪れ、消防団の方々がどのような思いで活動されていたのかを聞く中で、震災の影響がどれほど大きく深刻だったのかを実感しました。

消防団の方々の話から特に印象に残ったのは、「防災教育を通じて、次世代に震災の記憶を伝えることが大切」という言葉です。震災の教訓を未来の子どもたちに伝えることが、私たちが担うべき役割であると強く感じました。また、それを伝えるための手段は、講話などのお話だけでなく、実際の映像や画像を活用してトラウマになってしまうほどの震災の恐ろしさを伝えることも大切であると気づけました。

震災の記憶を語り継ぐことは、被災地に限らず全ての地域において重要です。今回の経験を通して、震災を風化させないことの大切さを学びました。今後、教員として子どもたちに防災意識を根付かせる教育を実践していくために、今回学んだことをきちんと吸収していきたいと思えます。



## 初等教育専攻1年 村上はな

消防団の聞き取りに参加し、当時被災地で活動されていた方々から、現地でお話を聞くという貴重な経験ができた。私は東日本大震災のことを詳しく学んだことがなかったため、今回の経験で当時のことを確認するとともに、救助や支援をする立場から見た震災について考えることができた。

お話の中で、「活動中にご遺体が見つかったとき、ショックな気持ちと同時に安堵の気持ちがあった」という言葉が特に心に残った。震災で亡くなった方々を悼む気持ちだけでなく、ご遺体が見つけれられて大切な人のもとに帰ることができたことへの安心感という、支援する側が抱いた気持ちに触れることができ、震災による被害を受けていなくても何かを思っただけであり、誰かの助けになることができると実感できた。

私は今まで宮城県に住んでいながら、震災で大きな被害を受けていないことに対して、どこかでうしろめたさを感じていたが、その必要はなく、私も震災について考えつづけ、誰かの支えになりたいと思って行動できると気づくことができた。その気づきを得られた点でも、支援する立場から見た震災について、学び考える機会となった今回の聞き取りに参加でき、非常によかったと感じている。これからは、教員を目指す立場から、子どもたちに何を伝えられるのか考えながら、様々な立場から見た震災について学んでいきたい。



## 初等教育専攻1年 目黒和迦奈

現地で震災当時に出動された消防団のお話を聞くことができ、学校の中のみでは知ることのできないことを知ることが出来ました。消防団の方々の話を聞いて一番に感じた事は、震災の恐ろしさを分かっていると勘違いをしていただけで甘く見ていたということです。

震災当時の様子や自分では想像したことの無かった亡くなり方をされた方の話を聞いたことによって、座学では知ることのできないことを知ることが出来ました。今回の学びを自分の中にとどめるのではなく、もっと周りに伝え継いでいけるようにしたいと感じました。将来教員になった時には、自分の持っている正しい知識を子供たちにしっかりと伝え、「自分で自分の命を守れる子ども」にできるようにしたいと感じました。また、実際に現場を見た人の話を聞くことは良い影響を与えるということを今回の視察で改めて感じたので、教員という立場から子供たちに同じような機会を与えられるようにしたいと感じました。



## 関上地区の視察

### 1. 活動の目的

東日本大震災後、甚大な被害を受けた宮城県関上地区の現状を理解し、地域復興や防災教育の一環として役立てることを目的とする。特に、震災から10年以上経過した現在、地域が抱える課題や住民の思いを掘り下げ、これを未来への教訓として活用することを主眼とする。

### 聴き取り対象者

#### ・長沼俊幸さん（61歳）

- 2019年に新発足した関上中央町内会の会長をされている
- 関上地区で語り部活動を行なっている



### 2. 関上地区の被害と変遷

#### 2.1 震災前後の人口と景観

- ・震災前の関上地区：
  - 約2,500世帯、6,000人が生活する漁師町であり、地域の象徴である松林や漁業施設が立ち並ぶ活気ある街であった。
  - 海産物の加工業も盛んであり、漁港周辺は商業的な賑わいが見られた。
- ・震災の被害：
  - 津波により750名の尊い命が失われ、未だ38名の行方不明者がいる。家屋の大半が流出した。
  - 被災後、地域の一部は災害危険区域に指定され、住民が戻れなくなる状況となった。

#### 2.2 震災時の住民意識

- ・津波に対する過信：
  - 「関上には津波が来ない」という認識が地域住民に浸透しており、これが避難の遅れを招いた大きな要因であった。
  - 昭和8年の津波被害を記録した石碑が存在していたにもかかわらず、その教訓が世代を超えて伝えられることはなかった。
- ・住民の証言：
  - 「津波が来る」という情報があっても実感が湧かず、避難をためらう人が多かったとの話を聞くことができた。





## 3. 避難所生活と課題

### 3.1 避難所の現状

- プライバシーの欠如：
  - 避難所では大勢の人が一緒に生活を送るため、家族間の会話や個人的な行動が常に他人の目に触れる環境にあった。
  - 特に病気で横になっている姿や育児の場面などがストレスの要因となり、多くの住民が精神的に疲弊した。
- 支援物資の分配問題：
  - 物資の公平な配分が難しく、一部の住民間で不満やトラブルが発生した。

分配の透明性を確保するため、すべての物資を住民の目の前で公開し、説明を行う対応が取られることもあった。

- 赤ちゃんや高齢者のケア不足：
  - 夜泣きする赤ちゃんへの対応や、高齢者がトイレを我慢した結果として体調を崩す事例が多発した。
  - 寒さや衛生環境の悪化がさらなる健康リスクを引き起こした。

### 3.2 仮設住宅の問題

- 狭い居住空間：
  - 3畳2間の限られた空間で家族生活を送る必要があり、生活の自由度が著しく低下していた。
  - 勉強やプライバシーを必要とする子どもや高齢者にとって、特に不便な環境であった。
- 寒さや騒音：
  - プレハブ構造による断熱不足や音漏れが生活の質を低下させ、住民のストレスを増幅していた。
- 災害救助法の問題：
  - 昭和27年に制定された災害救助法が現代の生活様式に適合せず、仮設住宅の設計や運用に課題を残していた。

## 4. 復興の現状と課題

### 4.1 住民の声と選択

- 現在の閑上地区の問題：
  - 住民の約7割が内陸移転を希望した一方、行政により現地再建が決定された。
  - 結果的に閑上地区に戻った住民は1,000人未満となり、震災前のコミュニティ再生が難しい状況が続いている。
- 現地再建の経緯：
  - 復興計画の決定までに3年が費やされ、この間に多くの住民が他地域へ移住した。
  - 計画の遅れが住民の希望との乖離を生む結果となった。

## 4.2 復興の定義と課題

- 住民の思い：
  - 「街が賑わっている」と評価する一方で、「震災前の生活や文化が戻らない」という寂しさを抱く声も多い。
- 復興の多様な解釈：
  - 復興は「物理的な再建」だけではなく、「住民の心の再生」や「地域文化の継承」を含むものと考えられるべきである。
  -

## 5. 教育現場への期待

- 震災の記憶の継承：
  - 教員を目指す学生が、震災の教訓や住民の証言を基にした防災教育を推進してほしい
  - 子供たちにとって13年前の震災は、戦争のように伝わりづらいものになっているのかもしれない。
  - 子どもたちに「震災のリアル」を伝えてほしい
- 具体的な伝え方：
  - 視察で聞いたことでもいいし、語り部の人から聞いた話をそのまま子供に伝えてほしい。それは地震のことだけでなく、避難所でどのような生活をしていたのかということや、仮設住宅での過ごし方などについても同じように伝えてほしい。
  - 聞いてきた話を子供たちにわかりやすい言葉で伝えると、子供たちもわかってくれる。



## 6. 総括

この聞き取りを通じて私たちは二つのことがわかった。

一つ目は伝承することの難しさと教員ができる伝承についてである。私たちはこれまで様々な被災地を視察してきたが、昔あった地震から石碑が建てられているのにも関わらず、危機感を持って逃げるができなかったという例を多くみてきた。閑上地区でも聞き取りの中から別の噂によって伝承がかき消されてしまい、逃げなかったという話を聞くことができた。そこで私たち教員には正しい歴史を子供たちに教えていかなければいけないという使命があると思った。そのために必要なことは今回の話だけでなく色々な経験から伝えていけると考える。

二つ目は復興のリアルについてである。これまで視察してきたところは、すでに再建が済んでおり普通の暮らしを送って数年経っているというようなところがほとんどだった。そのためどのような暮らしをしていたのかということは不透明な部分があった。しかし、今回の仮設住宅での生活の話や災害救助法による意図しない形の避難生活はそこで生活している人たちを苦しめていたということがわかった。このような話があったが、元々この地域で暮らしていた人の中には、元々いた人だけでまた生活していきたいという思いがあることや、新しく移住してくる人も受け入れていかなければいけないという葛藤がこの聞き取りの中でわかった。

